

関係各位

那須雪崩事故検証委員会委員長 戸田 芳雄

- 当委員会では、平成 29 年 3 月 27 日に那須町において発生した雪崩事故について検証するに当たり、平成 22 年 3 月 27 日の春山安全登山講習会中に発生した雪崩（以下「7 年前の雪崩」という。）について調査しております。
- お忙しいところ大変恐れ入りますが、7 年前の雪崩に関して次の質問にお答えいただければ幸いです。
 - 1 7 年前の雪崩に関し、次の事項について覚えている範囲で御回答ください。
 - ・ 雪崩が発生した際の天候、積雪の状況
 - ・ 雪崩発生時刻
 - ・ 雪崩に巻き込まれたときの状況（本人及び他の参加者）
 - ・ 雪崩発生直後の救助の状況
（自力で脱出できたか、他の参加者に救助されたか、他の参加者を救助したか）
 - ・ 負傷の有無（本人及び他の参加者）
 - ・ 雪崩に巻き込まれてどのように感じたか

雪崩が発生した際の天候は晴れ、積雪の状況はやわらかな雪が積もっていたかと記憶しています。発生時刻としてはお昼ごろだったと記憶しています。

雪崩に巻き込まれた状況として、雪溪のちょうど真ん中あたりで参加者全員が休憩していたところ、音がして上を見上げたら雪崩が迫っており「雪崩だー！」と叫んだ記憶があります。雪崩からは自力で脱出しました。怪我はありませんでした。

雪崩に巻き込まれたときは流れていく雪の上を腹滑りしているような状態でしたので、事前の講習で覚えた滑落停止の体勢を無我夢中で行っていました。流された直後は恐怖というよりは助かったことへの安堵のほうが強かったと覚えています。

2 7年前の雪崩発生後の対応に関して、次の事項について覚えている範囲で御回答ください。

- ・ 雪崩発生直後、講習会講師、顧問及び引率者から参加者に対し、どのような説明があり、どのような対応があったか。
- ・ 雪崩が発生した2日目の訓練終了後から、講習会が終わるまでの間に、雪崩に関して、高体連、講習会講師、顧問、引率者などから、状況や対応等について説明があったか。
- ・ 講習会終了後、雪崩に関して、高体連、講習会講師、顧問、引率者などから、状況や対応等について説明があったか。また、雪崩について、校長や担任等に報告をしたか。
- ・ 平成22年の春山講習会の訓練時に雪崩が発生したことについて、新入部員に当時の状況を説明するなど、7年前の雪崩に関して部の中で、情報の共有を行ったか。

申し訳ありません。
覚えていません。

以上、御協力ありがとうございました。

関係各位

那須雪崩事故検証委員会委員長 戸田 芳雄

○ 当委員会では、平成 29 年 3 月 27 日に那須町において発生した雪崩事故について検証するに当たり、平成 22 年 3 月 27 日の春山安全登山講習会中に発生した雪崩（以下「7 年前の雪崩」という。）について調査しております。

○ お忙しいところ大変恐れ入りますが、7 年前の雪崩に関して次の質問にお答えいただければ幸いです。

1 7 年前の雪崩に関し、次の事項について覚えている範囲で御回答ください。

- ・ 雪崩が発生した際の天候、積雪の状況
- ・ 雪崩発生時刻
- ・ 雪崩に巻き込まれたときの状況（本人及び他の参加者）
- ・ 雪崩発生直後の救助の状況
（自力で脱出できたか、他の参加者に救助されたか、他の参加者を救助したか）
- ・ 負傷の有無（本人及び他の参加者）
- ・ 雪崩に巻き込まれてどのように感じたか

>・ 雪崩が発生した際の天候、積雪の状況

天候は晴れ、積雪は詳しくわからないですが雪質は表面が固めだったと思います

>・ 雪崩発生時刻

午前中、昼前

>・ 雪崩に巻き込まれたときの状況（本人及び他の参加者）

他の参加者と山の斜面で休憩中でした

>・ 雪崩発生直後の救助の状況

（自力で脱出できたか、他の参加者に救助されたか、他の参加者を救助したか）

自力で脱出できた

>・ 負傷の有無（本人及び他の参加者）

参加者含め特に怪我はなかったと思います

>・ 雪崩に巻き込まれてどのように感じたか

巻き込まれた時はあまりにも自分が無力に流されてしまったと感じた。後にだいぶ小規模な雪崩と知ったので、今回巻き込まれた雪崩でこれなら自然災害に寄る雪崩は到底太刀打ち出来ないのだろうと思いました

2 7年前の雪崩発生後の対応に関して、次の事項について覚えている範囲で御回答ください。

- ・ 雪崩発生直後、講習会講師、顧問及び引率者から参加者に対し、どのような説明があり、どのような対応があったか。
- ・ 雪崩が発生した2日目の訓練終了後から、講習会が終わるまでの間に、雪崩に関して、高体連、講習会講師、顧問、引率者などから、状況や対応等について説明があったか。
- ・ 講習会終了後、雪崩に関して、高体連、講習会講師、顧問、引率者などから、状況や対応等について説明があったか。また、雪崩について、校長や担任等に報告をしたか。
- ・ 平成22年の春山講習会の訓練時に雪崩が発生したことについて、新入部員に当時の状況を説明するなど、7年前の雪崩に関して部の中で、情報の共有を行ったか。

>・ 雪崩発生直後、講習会講師、顧問及び引率者から参加者に対し、どのような説明があり、どのような対応があったか。

状況確認の後、山を下るよう指示がありました

>・ 雪崩が発生した2日目の訓練終了後から、講習会が終わるまでの間に、雪崩に関して、高体連、講習会講師、顧問、引率者などから、状況や対応等について説明があったか。

ありました

>・ 講習会終了後、雪崩に関して、高体連、講習会講師、顧問、引率者などから、状況や対応等について説明があったか。また、雪崩について、校長や担任等に報告をしたか。

終了後は特に覚えていませんが、説明は一部されていきました。
雪崩に関しての報告はしなかったです

>・ 平成22年の春山講習会の訓練時に雪崩が発生したことについて、新入部員に当時の状況を説明するなど、7年前の雪崩に関して部の中で、情報の共有を行ったか。

正確な説明ではなく、話の雑談といった雰囲気です話をしたことはあります

以上、御協力ありがとうございました。

関係各位

那須雪崩事故検証委員会委員長 戸田 芳雄

- 当委員会では、平成 29 年 3 月 27 日に那須町において発生した雪崩事故について検証するに当たり、平成 22 年 3 月 27 日の春山安全登山講習会中に発生した雪崩（以下「7 年前の雪崩」という。）について調査しております。
- お忙しいところ大変恐れ入りますが、7 年前の雪崩に関して次の質問にお答えいただければ幸いです。
 - 1 7 年前の雪崩に関し、次の事項について覚えている範囲で御回答ください。
 - ・ 雪崩が発生した際の天候、積雪の状況
 - ・ 雪崩発生時刻
 - ・ 雪崩に巻き込まれたときの状況（本人及び他の参加者）
 - ・ 雪崩発生直後の救助の状況
（自力で脱出できたか、他の参加者に救助されたか、他の参加者を救助したか）
 - ・ 負傷の有無（本人及び他の参加者）
 - ・ 雪崩に巻き込まれてどのように感じたか

- ・ 天候は快晴、積雪は 30cm 以上あったと思われるが、雪上は普通に歩行可能
- ・ 雪崩発生は午前 10 時半から 11 時ごろだったと思われる
- ・ 発生時、ピッケルを使用して斜面を歩行する訓練の準備中であった。
斜面に背を向けて、斜面の下を向くような形で準備をしていたところ、雪崩が発生。「ゴーツ」という轟音と共に「雪崩だ！」という声が聞こえたが、そこからは間もなく雪崩に巻き込まれ、身動きはとれなかった。息が出来ず、正直死ぬかもしれないのかとも思ったが、直前に講習で教わっていた雪崩に巻き込まれたときの体勢をとり、30 秒少々して流れも止まった。
- ・ 発生直後、私はほぼ全身が雪に覆われたが、辛うじて顔のあたりに被った雪が少なく、顔のあたりの雪をはらって、何とか起き上がることが出来た。他の参加者も同じような状況であったと思う。一人だけ、他校の参加者でひっくり返って、顔が雪中に埋まり、足だけが出ていた生徒がいたが、まもなく引っ張り出され、大事はなかった。
- ・ 負傷は私を含めてなかったように思うが、足を軽く痛めた（ねんざ？）生徒が他校に一人いたような気がする。詳細は分からない。
- ・ 先にも述べたが、巻き込まれたときは息が出来なかったため死ぬかもしれないと感じた。

2 7年前の雪崩発生後の対応に関して、次の事項について覚えている範囲で御回答ください。

- ・ 雪崩発生直後、講習会講師、顧問及び引率者から参加者に対し、どのような説明があり、どのような対応があったか。
- ・ 雪崩が発生した2日目の訓練終了後から、講習会が終わるまでの間に、雪崩に関して、高体連、講習会講師、顧問、引率者などから、状況や対応等について説明があったか。
- ・ 講習会終了後、雪崩に関して、高体連、講習会講師、顧問、引率者などから、状況や対応等について説明があったか。また、雪崩について、校長や担任等に報告をしたか。
- ・ 平成22年の春山講習会の訓練時に雪崩が発生したことについて、新入部員に当時の状況を説明するなど、7年前の雪崩に関して部の中で、情報の共有を行ったか。

- ・ 講習会講師の滝田さんおよび、顧問であった矢板東高校の関谷先生は、まず安全の確保を図り、一人一人の状況を確認していた。関谷先生が無線で本部に連絡し、雪崩発生の状況と全員無事の報告を入れていた。正直、何が起こったか分からない状況であったが、先生方の対応には安心感を覚えていた。しかし、本部からは「安全が確保できているようなら講習を継続するように」といった旨の連絡があり、滝田さん・関谷先生ともども、我々参加者も驚いていたことを覚えている。
- ・ 訓練終了後、特に対応等の説明は高体連をはじめ、講師・顧問・引率者などからはなかったと記憶している。誰かは忘れたが、「なるべくこの雪崩の件を口外しないように」といった旨を言われたように思うが、誰だったかは覚えていない。
- ・ 新入部員にあたる後輩には、こんなことがあったという程度の思い出話として話をしていたが、死者や重傷者が出ていたわけではないので、それほど危機感をもって話をした記憶はない。

以上、御協力ありがとうございました。

検証委員会聴取記録

○聴取日：平成29年9月18日(月)10:30～11:00

○

質問者	質問・指示事項等	回答者	回答事項等
小島委員	7年前ということだ、いぶ記憶も薄れているかと思うんですけども、まず最初に当時の状況をちょっと知りたいと思ひまして。	元 教諭	はい。では、答えられる範囲で答えさせていただきますが、当時、講習会2日目ということで、2日目が一番メインの講習なんですね。何班かに分けて子供たちを雪上訓練させる。で、例年どおり、郭公沢周辺で行いました。前日からの降雪もなく、当日も非常によい天気なのでこれは絶好の講習日和だということで我々は出かけました。ですとあの…、テント張って…今回のテントと同じ場所なんですけども、そこからずっと車道を通り切ると、峠の茶屋の方に向かひまして、途中どういう道に下りたのか記憶が定かではないんですが、郭公沢上部に多くの班が出まして、私の班は郭公沢の手前の斜面で講習をしておりました。講習してまして、無線から雪崩が起きたということで連絡が入って、周囲にも講習をしていた班がいましたので、その場は非常に緊迫した空気だったのを覚えています。救助が必要かどうかということで、無線で飛ばしたんですけども、大丈夫だと、自力か又は近くに居る者で全部掘り起こすことができるので、怪我人もないので大丈夫だということで、その場は収まりまして、で、その後も講習が続けられまして、だいたい3時くらいをめぐりに全員キャンプ地に引き上げました。で、巻き込まれた学校の生徒というのが、私がいまして矢板中央高校と、矢板東高校。で、もちろん私は生徒たちにどういう状況だったのかということを確認したところ、自分たちは腰ぐらゐまで埋まると、矢板東の生徒たちはだいぶ深くまで埋まっていたようだというので話をして、たいへんだったなあと話をしてはいたんですけど、そのときの生徒の様子はけっこうあつげらんとしていて、こんな経験めつたにないね、ということで話をしていました。はい。これが当時の状況になります。
	当日は、降雪はなくて、積雪はどのくらいだったんですか。だいたい膝くらいとか。		ほとんどラッセルの必要はない、意外と締まってましたね。ただ郭公沢の上部に詰めていく斜面のところだけ、膝下くらいの、まあ所によっては、雪が柔らかい所はもぐる所はありました。
戸田委員長	それ以外は、ほんのわずかという。		まあそれなり、例年どおりの積雪だったと記憶をしております。
戸田委員長	という、10cm、20cm、30cm。		いや、3、40cmぐらいです。
小島委員	無線で聞かれたということですが、状況ちょっと私も把握していないんですけども、雪崩が見えたとか、そういうのはあるんですか。		いえ、ありません。ちょうど私が、こういう、これが山だとしますと、私が講習をしていたのは山の斜面の上部のこの辺りで、越えたところが郭公沢ですので、ちょうど陰になって見えなかったんです。
小島委員	当然、雪崩なんて起きるという、そういう、危ないなあという考えは。		はい、私も長年雪山には行っておりますが、雪崩は起きにくい、まあ全く起きないということはありませんが、通常だと起きにくい状況だったと思います。ただ気温が上昇してきて、積雪の緩みなどはあったと思うんですけど…そこに何らかの力が加わって雪崩れが起きたのだと私は思っております。

小島委員	この事象が起きた後に、仲間と集まってそういう話というか、詳細な会議みたいな場で振り返りみたいな反省会みたいなのはやられるんですか。	その日だったか、次の日だったか、顧問の先生が集められて、
小島委員	顧問の先生か何か？講習？	たぶん顧問の先生…そういうことがあったとの報告があって、それについてどうするかという打合せをしたところ、今回は幸いに怪我也何もなかったもので、まあ別に家庭に報告する必要はないのではないかというぐらいの話がありました。
小島委員	それは…あの…報告する必要がないというのは。	余計な心配をかけないようにという意味です。
小島委員	参加の委員長の裁量で決めたのか、全体で決めたのか。合意したのか。	雰囲気としては、まず委員長の方から、今回は大事に至らなかったもので、雪崩が起きたと言うと余計な心配をかけることになるだろうから、あの、家庭に報告しなくてもいいのではないかという話があって、顧問同士もそうだねというような雰囲気だったと思います。はい。
小島委員	それに対して、顧問の方は異議というか。出なかった？	出なかったです。私としては生徒たちには、言うか言わないかはお前たちに判断させるからという言い方で、私個人は生徒たちに言いました。
戸田委員長	ああ、生徒が親にね。こういうことが起きたという…	ええ。たぶんそんな感じで、どこの顧問の先生たちも、直接子供たちに話すときには、そんな感じで、言うか言わないかは判断に任せるからという話は、何人かの先生はしていたというように覚えています。
戸田委員長	変な言い方をしますと、結局、箆口令を敷いたわけではないですね。	違います。箆口令というような厳密なものではありませんでした。
戸田委員長	それで、ま、当日か翌日に、その、顧問会議をやって、それは現場というか、あそこでやったんですか。	ロッジのところに行ったわけです。
戸田委員長	そのときにいた方は情報共有は。	しています。
戸田委員長	で、次の、翌年とかその翌年までの情報共有はどういうというか、こういうことがあったから、気をつけていこう、ここはこんな風にしないようにしよう、とかいうの、どういう状況だったんですか。	雪崩があったということはその、情報共有されていて、それはずっと、翌年も翌々年もこういうことがあったという情報共有はしていったと思うんですね。で、いつも訓練をしている郭公沢周辺というのは、だいたい3月はあまり雪崩の例がないところで、僕も長年高体連、高校時代山岳部だったんですけど、それまで郭公沢で雪崩れたという経験はなかったと思いますし、その辺だったら安全だろうということで毎年訓練をしていました。で、当然その、まあ上部、あの、運営側はハザードなどもしっかり確認、まあ当時はそれほどインターネットというのは一般的でなかったのかな、でも一応ここは急だよというようなことは確認していたと思います。ただ、今回3月に雪崩れたところに関しては、例年やっていないところなので、その辺に関してどうなのかということについては、自分にはちよつと分からないですけども。はい。

戸田委員長	いや、でも今回の講習会の引率の先生方についても、このことについては、今回の講習会の関係で事前にとか、話題は出たんですか。その、7年前の雪崩のこと。	今回ですか。今回は参加していません。
戸田委員長	そういうこと(雪崩)について、翌年翌々年あたりまでは共有されていたかもしれないけれど、その後の問題というのは。その、登山研修あたりで。	もちろん、雪崩が起きたかということに関しては情報共有されましたし、雪崩に関する当然雪山ですから、我々指導者側は雪崩に関する知識とか注意喚起というのは毎年行っていました。座学などでも、(講習の)1日目は座学なんですけれども、子供たちに雪崩の危険ということはしっかりと教えて、あと弱層テストというのがあるんですけど、そこから雪崩が起きるんだよといったことは講習で生徒たちにデモンストレーションを何回かやりましたし、やっていました。
戸田委員長	それって、いつ頃までって分かりますか。何か、今年講習会に参加した先生方なんかも含めて、弱層テストは講習でやったという話なんですけれど、それ以外の雪崩の危険とかそういうのはあまり触れてないみたいなんですよね。講習内容は。	そうですね。そういうところは、私は離れて3年になりますので、その間どういうふうになってきたのか、全く分かりません。少なくとも自分がいた頃には、自分も言ってきましたし、雪崩に関する注意というのは、何らかの形で顧問の先生、生徒たちへの知識とか情報の共有はなされていたと思います。
戸田委員長	先生は4年ぐらい前までですか。やっておられたのは。	そうですね。
小島委員	山はお好きなようなんですけれども、山岳関係辞められたのは何か理由があるんですか。山岳部を。	学校そのものを退職しましたので。退職した理由はちょっと病気しまして。それが完治して、そろそろ戻りたいと思っているんですが。病気治癒が目的です。治りました。私学なので、元の学校に戻っているのとか、山岳部の顧問大変なので、県の方も、お手伝いできたらなど。元の学校に働きかけています。
小島委員	当時はどうですか。まあ、ざっくばらんにお聞きしたいんですが、そういう組織構造というのはよく分かっていないんですけど、先生の言うように、委員長が言うから、雰囲気的に間違いないから従うというようなこと、関係だったのか、それともっと民主的にいろんな人の意見を聞いて、合意とは言いませんけど、こうした方がいいんじゃないかという意見を取り入れていただけのような雰囲気だったかどうかということ、ちょっとお聞きしたいんですけど。	私は副委員長をしておりました。で、委員長の先生をもちろんよく知っていますし、先に言ってしまうと、意外と民主的でいろんな方々の意見をまあ吸い上げるという雰囲気でした。というのも、私ももちろん長年山を経験していますし、私以外にもその当時は経験者が多かったように思います。どうしても山の場合は、知識とか技術とか経験、実際にそういうものを身に付けている方ではないと、なかなか言えないものがあるんですよ。普通の他のスポーツみたいに理論だけで指導できないので、自らも実践してないといけないものですから、だからやっぱり経験の浅い先生はなかなか言えない。ある程度経験のある先生方が積極的に意見を出し合って決めていくということで、その経験者がたぶん、今回よりも以前の方が多かったと思います。だからいろんなところから、委員長が言うことに対して、こうじゃないかああじゃないかという意見が結構出ていました。

戸田委員長	冒頭にお話をいただきましたけれど、何か、自力で雪から脱出できた子供とそうでない子供がいるんじゃないかということで、第一次報告書の中ではみんな自力で脱出・救出したと書いてあるので、そこがおかしいんじゃないかという御指摘みたいなんですけれど、その辺はどうですか。	自分その辺は覚えていないんですね。とにかく自分の学校の生徒が巻き込まれたことで、頭がいっぱいになりましたので、とにかく自分の学校の生徒が無事でよかったと。だからその時子供たちが、矢板東高校の生徒たちはけっこう深く埋まったようですとか聞きましたけど、全員が自力で脱出できたのか助けが必要だったのかは、はっきりとは今のところは言えません。覚えていません。少なくとも矢板中央高校の生徒は自力で脱出しました。
戸田委員長	ちょっと話題変えますけど、今回事故の起こった場所辺りというのは雪崩が起こるかもしれないよというのを、ずっと前に、町の関係者とかがその当時の委員長あたりに言ったというような情報があるんですけど、そういうのはお耳に入っていましたか。	はい。
戸田委員長	入ってた？	はい。下見に行ったんですよ。春山講習会の下見ってというのは、通常の大会ではコースを実際に歩くんですが、毎年やっているということで、スキー場が営業しているときにロッジに行きまして、その方に今年もよろしくと言うだけなんです。断るだけなんです。そのときに、ゲレンデを見て、ちょうど真ん中のゲレンデかな、あそこは使わない方がいい、とそれははっきり言われたんですよ、亀裂が入ることがあるんで。他にも雪崩が起きやすい斜面があるから、あまりスキー場は使わないようにしてくれというようなことは言われました。
戸田委員長	奥ですね、一本木の奥の所ですね。	いつもゲレンデはあまり使わない。
戸田委員長	それはいつ頃ですか。何年ぐらい前。	それは多分、雪崩が起きた年かなあ。
戸田委員長	7年前の。	そのぐらい前だと思うんです。
小島委員	それはどなたから聞かれましたか。	スキー場の方です。
小島委員	当時もスキー場は閉鎖ですよ。	いえ、スキー場が営業している時に聞きました。
戸田委員長	先生、なかなか意欲的で。復職されてまた頑張ってやっていただくという決意をお聞きました。	で、ここから少し申し上げたいことがあるんですけど。

戸田委員長	どうぞ。	<p>今回の事故というのは実際に客観的に見て、翌日テント場の処理に行ったんですね。かなり雪降ってたんですよ、矢板中央高校も加えた学校の顧問の先生、副顧問の先生からも、こんなに雪が降っている状況でやるのかと、自分たちも思った。自分もこんなに行ってもみて雪が降っているとは思ってなかったんですね、やっぱりそれだけ雪が降ってれば雪崩が起きるっていうことは考えられる、経験者であれば。今回、委員長はじめ、他の二人の方は経験者ではあるんですけども、完全なる判断ミスだと僕は思っています。さらには、他から意見が出なかったというのも、経験者がいなかったんで、その場三人に任せていれば大丈夫だろうという雰囲気があったと思うんですね。山岳の顧問というのは、先ほども申し上げましたとおり、他のスポーツの顧問と違って、やっぱり経験者でないと指導ができないんですね、未経験者が指導してしまうとかえって危険、今回のようなことが起きると。県の方でどういってお考えなのかどうか分かりませんが、今後、教育活動としての山岳部の活動を継続していくのか、消極的な方向にもっていくのか。でも山岳部がある以上活動していかなければならないわけで、当然指導者も必要になってくるんですよ。山岳で一番大事なのは、とにかく安全に生徒を連れて帰る、最低限、山では死んではいけないということです。そのためにはやはり、指導者となる顧問の確保というのが必要となるんですね。年々、やっぱり自分が思うに、自分がいた頃は5年にいっぺん海外遠征なんかもしておりまして、自分も二度ほど遠征に行きました。そのための訓練として、かなり顧問の先生同士でシビアな訓練をして、経験や知識を身に付けて、トップダウンで下ろしていったんです。だから僕がいる頃には、顧問のレベルはかなり高かったんですが、話を聞いていると、年々と栃木県高体連の顧問のレベルというのは下がってきている。このままでは、続けるにしても事故は起きやすいと思うし、また山岳部のレベルも活動のレベルも下がってってしまうんですね。だから、こんなことを僕が申し上げるのは申し訳ないんですが、できれば県の方で、例えば各山岳部のある学校には、山岳の経験者ですとか元顧問ですとかを優先的に回していただいて、しっかりと指導していける体制を整えていただければありがたいというか、今後の山岳部の活動の安全と発展にもつながると思います。なかなか難しいと思うんですが、ちょっと含んでおいていただきたいと思います。申し訳ありません。</p>
戸田委員長	<p>当時の委員長というのは渡辺先生ですよね。その先生、今回もいらっしやって、今の委員長の猪瀬先生にはアドバイスしていたみたいなんですよ。相談をされて。あと菅又先生も。三人でいろいろ。その他の先生方も未経験ということですか。</p>	<p>その三人にしても、こんなこと言うのは三人に申し訳ないんですけども、本格的な雪山の経験があるかどうか。僕は菅又先生一人だと思っています。彼は僕と一緒にヒマラヤに2回行きました。僕らはそこそこそういう所の経験をしていますから、厳冬期の北アルプスなんかは何度も足を踏み入れました。しかし、他の渡辺先生と猪瀬先生は、せいぜい県内の白根山ぐらいしか経験してないんですね。さらにその菅又先生も途中でブランクがありまして、山における勘というのが鈍っていたんだと思うんです。私は継続的に山に入っていますが、そういったことで、果たしてその三人が本格的な雪山に対する判断ができたかどうか、非常に疑問に思っています。それ以外の顧問というのはなおさら経験がないですから、自分が雪山のことに口を出していいのかなという雰囲気はあったと思います。で、僕がいた頃は、一緒にヒマラヤに行っているとか、一緒に何回も研修をしているという先生もまだたくさんいたんですね。で、いろんな方面から意見が出てたんです。そういったものがなくなってしまったのかなと感じているんですよ。とにかく、今後このような事故を起こさないために一番大事なのは、顧問の力量を上げることだと思います。</p>
小島委員	<p>菅又先生は、どのような性格の先生なんですか。優しい方なんだろうなという感じでは見ていますけど。</p>	<p>すごく優しいいい方です。僕も2回ほどヒマラヤに行ったし、何回も訓練を一緒にしますけど、穏やかでいい方です。というか、三人全員いい方なんです。</p>
戸田委員長	<p>分かりました。どうもありがとうございました。</p>	

検証委員会聴取記録

○聴取日:平成29年9月18日(月)11:00~11:30

○関谷 恭弘

質問者	質問・指示事項等	回答者	回答事項等
小島委員	大候ほどのよつな状況だったのか。天気についてお伺いしたい。	関谷教諭	天候は晴れていたと思う。
小島委員	積雪はどれくらいあったか。膝上とか、くるぶしまでとか。	関谷教諭	積雪は、前後には雪が降っていなかった。スキー場に行ったときの積雪の感覚。締まっていないところに入っていくので、そんな深い雪はなかったと思うんですけど。
小島委員	先生は、雪崩には直接遭ったのか。雪崩が流れてきたのは見えていたのか。	関谷教諭	生徒を引率していて、生徒と一緒に流された。
小島委員	雪崩が流れてくるのは見えてくるものか。	関谷教諭	そういうことはないと思いますけど… 午前中のうちだったと思う。何かトレーニングをしていて、今は講師が滝田先生とわかっているが、いろいろ雪のところを歩く練習とか、雪に慣れるということで雪の中を前転したりした。次のトレーニングに移ろうかというときに、生徒と一緒に斜面を下にして雪面を平らにして座って休憩していた。自分の後ろの方が標高が高い感じで、前がよく見えていたので、晴れていたと思う。何か気配を感じて後ろを振り向いたら、雪の塊が波のような感じだった。そのまま気付いた時には腰の下が埋まっていて、でも上半身は出ているので周りによく見渡せた。全体がざっと流れていった。
小島委員	座ったままで、距離としては何mくらい。周りには、教員と生徒何名くらいいたのか。	関谷教諭	結構流されたと思う。数百mくらい。教員は私だけ、生徒は矢板東の男子が3名、矢板中央が数名で、全員が流されたんだと思う。
小島委員	流されているときに命の危険は感じたか。	関谷教諭	その時は感じていない。客観的に周りの景色も見えていた。このままではマズイと思って、事前にレッスンを受けていた、滑落停止訓練のピッケルを使わないで止まる方法を周りに指示できた。「雪をつかんで止まれ」と言った記憶があるし、後から、誰かわからないが、生徒が「あれで止まりました」と言ってもらった。そして、斜面の途中で止まった。
小島委員	頭まで埋もれて自力で脱出することが出来なかった生徒はいいたか。	関谷教諭	わからない。みんなそこまで言っている生徒はいないし、生徒と一緒に「埋まっている生徒を出せ」と言って救出したという記憶もない。上から雪がやってきたときバサッとかかって、自分は上半身だけ出て流れ、ただ最後、雪を掴んで止まる時には腹ばいになるしかない。下向きになるのか上向きになるかして雪を掴むことによって止まることができる。その状態では雪に入っているが、止まるための姿勢で雪の中に潜っている感じなので、自力で脱出が不可能というわけではない。下までザッと流れて、雪が締まって、デブリの状態になっている訳ではないので。

小島委員	流された後に、自分は助かったと思うのですが、その後の行動としては、周りの生徒を見回して安全を確認し、その後の行動として、みんな無事かと確認させたと思うが。	関谷教諭	2つの学校で、そんなに人数が多いわけではないので、すぐ確認は取れた。その後、まもなくして無線が流されていた。誰かはわからないが、たぶん当時の委員長の渡辺先生で、「現場にいる教員大丈夫か。報告せよ。」といった無線があったので、「全員が無事です」と応答した記憶がある。
小島委員	生徒も、その後泣いている人がいるとか、笑っている人がいるとか記憶はあるか。	関谷教諭	泣いている生徒はいなかったと思う。自分と同じ状態なので、ちょっとハイな状態で「びっくりしたな」とか「すごかったな」「どうにもならないな」とすぐ会話できる状態であった。動転してパニックになってしまっているという状態ではなかった。
小島委員	最近の新聞の高瀬さんの記事で、埋もれて息ができなかったという、この方は覚えていませんか。どんな生徒か。	関谷教諭	わかります。おそらく。
	当時の状態はわかりませんか。	関谷教諭	なんとも言えない。ただ、その子を掘り出したという記憶はない。
戸田委員長	そのことが起こってから、先生方で集まって情報共有をしたりしましたか。	関谷教諭	自分は、立場的に毛塚先生と同じ立場。顧問としてまだ2年目3年目なので、参加が2度目3度目なので、そういう話し合いの中に入っていないです。ただ、周りでも見ているはずなので、当然話しはなされていると思っています。
小島委員	事象が起きた後の話し合いはされたのか。	関谷教諭	ですから私はそこに入っていない。
戸田委員長	翌年以降も参加しているか。	関谷教諭	次の年が大震災の年で中止、次の年は参加、次の年は学校行事で不参加、その次からは参加している。
戸田委員長	その中で、事故の話が出て、気をつけましようと言った注意事項とか話し合いはなされたか。	関谷教諭	していない。誰に言っているかはわからないが、一つの話題として、流されたことがあるという話は、誰とは分からないが、話はされていると思う。
戸田委員長	正式な形で、みんなが集まって注意というわけではない。	関谷教諭	はい。
戸田委員長	もう少しさかのぼって、今回事故のあった樹林帯は雪崩が起こるといった話を聞いたことはないか。	関谷教諭	樹林帯のところは聞いたことがない。そこが話題になったことはない。今回言っている、奥の第2ゲレンデというんですか、左側のほう、今回も近づかないように、というのはよく聞いている話である。
戸田委員長	一本木の奥のところ、そこが共通で理解されていた。第2と第3のところ。	関谷教諭	ただ、訓練の場所が変わった。当時、自分が流された場所と、いつ変わったかはわからないが、ずいぶん手前側に変更になっているので、多分そういう配慮があったと勝手に思っていた。「前回雪崩があったから、こっちで講習するようになったんですね」とは確認はしていない。
戸田委員長	先生は、当時の班はわからないが、矢板東高の引率者だったが、その班の講師の先生は誰か。	関谷教諭	最初の検証委員会の時は、私は誰かわからなかったが、その後滝田先生だとわかった。
戸田委員長	その講師の滝田先生と先生の役割分担は、約束事はなかったか。	関谷教諭	特に約束事や役割分担はなかった。本当は自分が色々やれば、例えば自分が休んでいるときも滝田先生はザイルを張っていたので、手伝いをしたりできたと思うが、自分は何もできなかったのも、生徒と一緒に慣れていくことが役割だと。

戸田委員長	<p>第一次報告書について、何か言いたいことや思うことがあれば言ってほしい。</p>	関谷教諭	<p>我々が、現在山岳部に所属している生徒たちを、何とかして通常状態に戻すということで、組織を考えていかなければならない。今は止まっている感じがするが、特に夏山関係などの様々な場面で、ちょっとテンポが速過ぎると思っているところがある。再開であつたり、もう少し検証委員会の結果であつたり、きちんと提言を受けて動いていけばいいのにな、と私の個人的な感想です。結局、それを聞かずに動いて、この前の遺族会でそれを指摘されて、みんな辛い思いをしていて、専門委員の中にも何人もちょっと早過ぎるという意見もある中で、やれという話でやってみて、結局遺族には理解されないと思うが、そこまでも行っていなかったという状態、うまくいっていない感が自分たちの中であります。回答書作りにしても、何回か会合を開いて作っていった、最終的には三森部長でまとめてボリュームを増やしてもらったが、それがあまりうまくいっていないと、どうしたらよいかと迷っているところだ。委員長を決めるという話だが、組織的には委員長が必要なのか、逆に質問になってしまうのだが、その後何回かその委員長の話が出たときに、皆さんどうしていいかわからない状態。何人か手を挙げてくれる人もいるが、その人に責任を押しつけるというか、押しつけるつもりはないが結局一番前に立って色々なさされて。役割分担の話になるが、今後のことを考えてリーダーとして引っ張っていく人と、今までがどうなっていたのか、というところを分けたほうがいいのかとか…それを一人の委員長でやるのは難しいし。責任を分散させているという話になってしまふかもしれないが、副委員長を3人に分けてやっているが、自分はこの形で行けるのがいいのかなと思う。確かに、リーダーシップは弱いかもしいが、一般の組織で考えたら一番上に長がいるのが当然なのかもしれないが、この事態的に通常の状態ではないと捉えているので、だったら組織自体も通常で考えられるような組織では難しいのかなと考えています。</p>
戸田委員長	<p>誰がリーダーシップをとるかということは非常に問題になる。委員長がいない時にどなたがリーダーシップをとるかという問題になる。いなくても、トロイカ体制でできます、とか。</p>	関谷教諭	<p>委員長を決めるに当たり、委員長の職務軽減とかある程度必要ではないか。人的であつたり、様々な待遇というか、サポートがほしい。あとは、遺族会があるときに、1回目の時には臨床心理士の方が最後までいたり、ああいうサポートがあるというだけで、「見ていただけているのだな」という思いがあつたが、今回はそれも終了しているということで、甘えかもしれないがそういうサポートが我々に対してもう少しあってもいいのかなと思う。何時間も缶詰になって遺族会に参加した教員に対して。どうしても、余裕がないので、皆さん遺族のほうには向いているが、そこに参加している教員にももう少しサポートがあってもいいかなと思う。特に、今回初めて参加した先生方は、大きなショックを受けている先生もいて、眠れなくなってしまった先生もいると聞いているので、それでいいのかな、と思う。</p>
戸田委員長	<p>これが絶対にいいというのは難しい。ただ、一般的に外から見ると、委員長も決められないのかとなってしまう。そんな不安定な組織で、これから安全な登山を推進していくことができるのかということとはきつと問われる。今後の課題でありご遺族も関心を持っていることでもある。他にまだ、これは言っておきたいということはあるか。</p>	関谷教諭	<p>委員長を決めるに当たり、委員長の職務軽減とかある程度必要ではないか。人的であつたり、様々な待遇というか、サポートがほしい。あとは、遺族会があるときに、1回目の時には臨床心理士の方が最後までいたり、ああいうサポートがあるというだけで、「見ていただけているのだな」という思いがあつたが、今回はそれも終了しているということで、甘えかもしれないがそういうサポートが我々に対してもう少しあってもいいのかなと思う。何時間も缶詰になって遺族会に参加した教員に対して。どうしても、余裕がないので、皆さん遺族のほうには向いているが、そこに参加している教員にももう少しサポートがあってもいいかなと思う。特に、今回初めて参加した先生方は、大きなショックを受けている先生もいて、眠れなくなってしまった先生もいると聞いているので、それでいいのかな、と思う。</p>

戸田委員長	事故を体験したというのではなくて、説明会とかに出てということか。	関谷教諭	実際は、自分もそうだが、現状を何とかやりくりしているのが精一杯で、事故の時のことを振り返っている余裕がないというか、安全対策とかの意味では振り返るが、実際自分が救出していた場面を振り返って、ストレスを受けていることを考えられていない方もいるのではないかと。これが一段落ついた時に、色々なところで症状は出てくると思う。
戸田委員長	教育委員会などで、事故を体験された先生方について、あるいはその周りで大変な思いをされた方についてはカウンセリングが必要だという話は、検証委員会でも何回もお話をさせていただいているところですが、改めて考えていく、重要なことだ	関谷教諭	カウンセリングを受けること自体が難しい。時間的に。一般の仕事もあるので。
戸田委員長	そういうところも考えていかなければならない。ただ、「カウンセリングをどうぞ」と言っても、誰も行かないし、時間もない。	関谷教諭	ある学校の先生が、この事故をきっかけにお休みになってしまうとか。それをどこが面倒を見るのかな、と思う。
戸田委員長	教育委員会から、臨床心理士の派遣とか、システムをうまく作ってもらって、生徒のカウンセリングの時間を作るのと同じように、場所は学校の中なのか近くの喫茶店なのか、何か方法を考える必要はある。先生自身は辛いですか。	関谷教諭	わからない。たぶん大丈夫なのだと思う。ただいろいろ…
戸田委員長	先生方自身も色々体験されているし、後々もきちんと支援し本来のお仕事に戻られるようにしないと。	関谷教諭	なかなか言ってしまうと周りに波及してしまうので。
戸田委員長	言えないわけね。	関谷教諭	はい。
戸田委員長	カウンセリングは重要だし、遺族の方、兄弟、同じ仲間が助かった子どもも大変、関わった先生、幅広く求めれば受けるというのではなく、むしろ積極的に受けさせるという風にやらないと深刻な状況になってしまう。教育委員会にもいろいろと御検討いただくということで。よろしいですか。大変貴重な御意見ありがとうございます		

検証委員会聴取記録

○聴取日：平成29年9月18日(月)11:30～12:15

○渡辺 浩典

質問者	質問・指示事項等	回答者	回答事項等
小島委員	7年前のことなのですが、当時の気象状況について覚えていることについて教えて欲しい。	渡辺教諭	条件はよかったと思う。風もなく、おそらく晴れてはいた。
小島委員	雪なんですけども、積雪ですか、深さはあったんでしょうか。	渡辺教諭	ある程度、雪はあった、深さまでは覚えておりません。
小島委員	大体でいいんですが、訓練やられた場所でもいいんですけども、膝まで位まであったとか、くるぶし位までだとか。	渡辺教諭	新雪ではないのもぐるような雪ではなかった。記憶はあいまい。一応、全面に訓練ができるような状態で雪がついていた。
小島委員	その歩いている訓練の所は、アイスバーンというか、固まっていたか。	渡辺教諭	アイスバーンではなかった。
小島委員	雪は多少なりともあったか。	渡辺教諭	はい、新雪でもなく、ある程度しまった、完全にかちかちではない、ある程度もぐる雪ではあるとは思いますが、新雪ではなかった。
小島委員	歩きにくい雪ではなかったイメージか。	渡辺教諭	そうですね。はい、多分。かちかちでもなく、新雪でもないっていう雪でした。
小島委員	7年前に雪崩が発生したときは、先生はどういう場所にいたか。	渡辺教諭	雪崩を誘発した班に付いて行動していました。
小島委員	直接被害があったとか、流されたことは。	渡辺教諭	いえ。私は上にいました。
小島委員	先生より下の方が流されたのか。	渡辺教諭	私が直接見たのはかなり下のところで、流されていくのを見た感じで、雪崩そのものが起きているところは見えませんでした。
小島委員	雪崩が起きたかどうかは分からなかったのか。	渡辺教諭	そうですね、下で流されているのを見たという感じ。
小島委員	おおよそどの位の距離だったですか。	渡辺教諭	ある程度の高度差はあった。雪崩が起きた沢があって、その上にいて、上から沢に入るようなところで雪崩が起きて、下のところで流れているのを見たような感じです。
小島委員	その時、雪崩が起きてもおかしくないような状態だったか。	渡辺教諭	班が、雪崩が起きたところの上を歩いていて、下りようということになり、私がたぶん最後尾で、私が下り始まったが、雪の間から岩が出ていて、登るには登れるが、生徒が下りるには下りづらいだろうということで、私はそこを降りたが、二人の講師が雪のついた斜面を下りた方が生徒にとって歩きやすいだろうということで、主講師が確保をして、もう一人の講師がロープを付けて、そのルートの確認に下りていって、そこで雪崩を誘発したような状況です。主講師の認識としては、ロープを出しているの、念のためというような考えがあったのかなと思います。
小島委員	ロープを使うということはそれなりの斜面がある。	渡辺教諭	安全確保ということで。
小島委員	事象後に下りていったときには、流されていた方は起き上がっている状態だったか。	渡辺教諭	私は現場には駆けつけていなかったと思うが、その記憶はあいまいだが、無線で呼びかけて大丈夫だという、全員無事だという応答があった。見た瞬間は大変だと思いき、無線で呼びかけ、全員無事であるという応答があって、ああよかったと思ったと思う。記憶は曖昧だが、私は一緒に行動している生徒たちをそのまま下ろしていった記憶があり、現場に入っていない。無線で大丈夫だと聞いているので、おそらく、みんな下りてきてから、流された講師から話を聞いたと思います。

小島委員	話はどこで聞いたのか。	渡辺教諭	記憶は曖昧だが、いつも講習が終わるとスキー場のセンターハウス前に来て解散して、そこで振り返りをしたり話をして休むので、おそらくそこで話をしたと思う。下にいた講師から、上で行動しているのだから真下は避けていたという話を聞いた記憶がある。起きた後、下で流された班の人の話をしている、場所ははっきりしないが、現場ではやっていないのでセンターハウスだと思う。
小島委員	話しされた時は、流された人は、引きつっていたのか、緊張していたのか、笑っていたのか。	渡辺教諭	生徒とは接触していない。講師の話からだと、大丈夫かと思う、大事には至らなかったのかな。私は上から流されたのを、かなり距離があったが、何人かが雪と一緒に静かに流れていくような感じで、人間の姿が見えたので、姿勢はわからないが、体が見える状態で流れていくのが見たので、雪の圧もそんなになく流されたのかなと。下りてきた後、講師の先生方もそれほど深刻ではないか、生徒たちとは接触していないので。生徒たちはショックだったかもしれませんが。
小島委員	その後の情報共有は、専門委員長としてどのように行ったか。	渡辺教諭	記憶はどの場面かはっきりしないが、それ以降その沢筋では雪上訓練をしないという共通理解になっていたと思う。それが、下りたところでやったのか、それとも、専門委員会の前年度の行事の振り返りでやったのかははっきりしないが、その沢筋でその後やらないことになっている。ただ、きちんと文書化したり、申し送りはしていませんでしたので、居合わせた者の共通理解という程度で終わってしまっていた。
小島委員	専門委員長ということで、何か報告を書くということは当時からなかったのか。	渡辺教諭	ちゃんとしたそういう、システム化されていませんでした。
小島委員	その後他に話は出なかったのか。もう終わりという感じか。	渡辺教諭	自分の所属校の生徒も巻き込まれていなかったと思うので、自分には情報は入らなかった。大丈夫だったんだという認識で、重大事故ではなかったんだという認識でした。
小島委員	これから気を付けようね、あそこは行かないようにしようねということか。	渡辺教諭	はい。
戸田委員長	直接、生徒とは話をしていないということだが、講師と話した時に、講師の中には引率の先生も含まれているのか。この次は何かやらないようにしようとか、雪崩があったとか。	渡辺教諭	具体的に誰までいたかは覚えていない。
戸田委員長	委員長さんの意識としては、講師が中心だった、引率の方。両方いらっやったが。全員が集まってということではない。	渡辺教諭	三々五々集まってという感じだったかもしれませんが。
戸田委員長	樹林帯のところは、以前訓練されたこともあるそうだが、いつごろか。	渡辺教諭	10年以上、私が委員長になる前です。
戸田委員長	その時の積雪状況は覚えているか。	渡辺教諭	アイスバーンでもなく新雪でもなく、ちょうど訓練にいいぐらいの雪だった。
戸田委員長	今回ほど積もってはいなかったのか。	渡辺教諭	今回は前日に新雪がありますので。
戸田委員長	10年以上前のときの樹林帯の目的と目標点は。	渡辺教諭	雪上訓練で、樹林帯のすぐ上くらいだったかと。

戸田委員長	7年前は委員長であったということで、別の情報では町の関係者からあの辺は樹林帯も含めて危険で雪崩が起きそうだから止めた方がいいよというように、10数年前に言った覚えがあるという話があるが、そういうことは伝わっていたか。	渡辺教諭	わからない。私が委員長時代だと思うが、私が危険性を認識していた所で雪崩が起きて、スキー場に入らない方がいいというふうに、下見に行った者が聞いたことはある。それは、私が雪崩の危険性を認識していたのも雪崩が起きたような跡を見た記憶がありまして、忘れていたんですが、警察の聴取の中でお話した、下見に行った者がスキー場の者から聞いて私にFAXを送ったことがありました。それは、私が雪崩の危険性を認識していたスキー場奥の第2ゲレンデの斜面。
戸田委員長	前にもあった奥という話ですね。第2、第3ゲレンデの間。	渡辺教諭	7年前に起きた箇所については、分からないです。聞いた記憶がないです。
戸田委員長	情報を共有して伝えていなかったと新聞記事にもあるが、そこはどうか。	渡辺教諭	7年前の件もそうだが、きちんとした文書化というシステム化がなされていなかった。
戸田委員長	文書化されないにしても、慣例で専門委員会などをやるときに、雪崩の危険性があるので、あそこではやらないようにしましょう、気をつけようということは話題にはならなかったか。	渡辺教諭	7年前の時には、そのあと沢筋で練習しているので、あったと思う。その場にいた者の理解で広まっていた。講師をやる者が毎年決まっているので、それで十分という認識。
戸田委員長	その場にいた人の経験談みたいなものですね。そこから教訓を見いだすしかない。	渡辺教諭	きちんと文書で残すというシステムがなかった。
戸田委員長	厳しい言い方になると、情報の共有がしっかりと行われたとはいいたくないということですね。		
小島委員	当時委員長をしていて、山に登っている。今回と違うのが、このときの本部体制は。	渡辺教諭	記憶がはっきりしないが、全行程一緒になったのではなくて、途中から合流した。本部業務をしながら、他の班の行動を現地に行き行って、たぶん誘われて一緒に行動した。
小島委員	そういうとき、本部は存在していたんですか。7年前は	渡辺教諭	はい。
小島委員	本部としておたかに詰めていた人数は。	渡辺教諭	たぶんあの時も一人だったかと思う。手薄なんで。
小島委員	その時も、渡辺先生も無線を使って、雪崩が起きたということを本部に連絡をしたという記憶は。	渡辺教諭	私は上に行っているのです。
戸田委員長	それが移動本部になったと。	渡辺教諭	移動本部というかたちです。
小島委員	そういうことも場合によってはあるのか。	渡辺教諭	大会等でも、本部は基本的には移動しないですけども、ちょっと様子を見に行くこともします。
戸田委員長	よく大会やなんかだと養護教諭や保健師が交代で本部に待機するなどは全然なかったか。	渡辺教諭	関東大会の時だけです。
戸田委員長	関東大会の時だけ。講習会ではない。	渡辺教諭	はい。
戸田委員長	結局、今回の事故の時、本部から学校等へ連絡という約束になっているがどうもそこが曖昧。助かった生徒は直接保護者へ連絡があった。そこら辺をどう捉えるかが難しい。校長先生などは、何かあったら本部から連絡してくれると思っていたようだが。	渡辺教諭	無線をそれぞれ持っているのです。連絡は本部に集約。
戸田委員長	その本部の猪瀬先生ですけど、無線から離れていたという。	渡辺教諭	そうですね。

戸田委員長	まあ、たいへん残念なことがあって、一報もできなかったというのがかなり問題になってますよね。話題になっているというかね。それは無線を持たないで、移動本部にもならないですよ。本部が消失してしまったという感じで、そのへんはいかがなんでしょうか。	渡辺教諭	たぶんちょっと手放してしまったのかなと思う。油断と言ってしまえば...
戸田委員長	事故が起こらないと思っていれば、油断ですね。後の通報が何でそんなに遅いのっていろいろ話題になっていますね。		
小島委員	通信手段でいいますと、無線が第一かと思いますが、スマホを試す時間はなかったのか。	渡辺教諭	今振り返ってみれば、結果的に、現場で私が中心になって指示を出してる感じなんですけど、何度か研修で、救急、心肺蘇生法とかAEDの使い方などの研修を消防署の救急隊員から受ける中で、初期対応で、誰か一人がいろいろな人に対応を割り振るといって研修を受けているんですが、それが私にはできなかった。それができていけば、他の先生に、無線が繋がらないから携帯で通報してとか、こっちを探してくれといった指示ができたと思う。それができず、搜索を優先で対応していた。
戸田委員長	目の前の子供助けるのが最優先です。本来はそこは本部がしなければならぬ役割でしょ、ああいう組織であれば。	渡辺教諭	そうですね。
戸田委員長	でも前委員長さんだから、いろいろ関わって中心にやられたんでしょうけど。現場に一番近くで見ていると。それが少し残念といえば残念ですね。	渡辺教諭	そうですね。
小島委員	本部の方から30分おきに、状況はどうですかというような連絡は、通常はしないんですか。	渡辺教諭	その日は、行動が始まって間もなかった。通常であればあります。一日行動しているときなんかですけれど。
小島委員	何分くらい。一時間か30分くらい。	渡辺教諭	そのときによって、決めたり決めなかったり。一応、定時交信を決めたりとか、そういう場合もあります。
小島委員	呼びかけは本部から。	渡辺教諭	(本部から)はなかったです。まあ、行動して割と間もない感じでしたから。
戸田委員長	登山と捉えてなかったんでしょうね。やっぱりね。	渡辺教諭	そうですね。スキー場の近くということで。見える範囲だからという意識で。
戸田委員長	全く違う話なんですけれども、例えば1班で、菅又先生が講師でいられましたよね、主たる指導はそこでなされるんでしょうけれども、同じ学校の毛塚先生と一緒にいられた。その役割分担というのはどういうふうに考えているんですか。	渡辺教諭	私の理解なんですけど、主講師の方が実技の講習を行い、生徒が何か活動しますとき、必ず教員が付き添いますので、怪我があったときの対応ですとか、そんなことは所属校の教員がいなくてはいけないので、そんなふうなのが所属校の教員の役割かなと思います。
戸田委員長	具合が悪くなったりとかという健康観察とか、その対応とかですね。そういったことがどんなふうかかってことがなかなか前の聞き取りとかいろいろなところでもあまりちょっと毛塚先生の動きとか見えてこないんですね。	渡辺教諭	従来も班編成をするときに、実技を教えることのできる教員に限られていますので、どうしても他校の生徒を教えることになりますので、人間のやりくりがつかうときは、所属校の先生がその班に付くという形で、従来もだいたい班を編成していたと思います。

戸田委員長	例えば、うちの委員の先生も経験から、生徒がやりたいとか、あそこに行こうとか言うときには、自分の学校の生徒すらなかなか止めることも難しいというね、ましてや他校の生徒であって、体力や技術もあって意欲もある子供を、他校の講師が止められるかっていう問題があるんですけど、どうなんでしょうね。委員の中でもそこは、経験者としては難しいんじゃないかと。	渡辺教諭	確かに、自分の学校の生徒ですとある程度関係ができていますので、こちらの判断をある程度言い聞かせることは可能だと思いますが。難しさはあるかと思います。
戸田委員長	外部講師も結局、同じことじゃないですかね、専門家であつてもね。まあ、私なんか考えると、個人でもし制御ができないのであれば、その講習会全体の講師全体、引率者も含めて、こういう内容で、範囲はこうで、あとは絶対だめという、念押しをしておけばだいぶ違ったのかなと。まあ、マネジメントの問題なんですけれどもね。これまでの講習会では、行動の範囲とか内容とかについては、共通理解をする場というのは設けられていたんですか。	渡辺教諭	2日目の講習では、1日目に必ず本部で講師打合せを行いまして。今回の3日目については臨時の行動だったので、そこは正直言って甘かったと思います。
戸田委員長	臨時の行動だからこそきちんとやらないといけないという理論も成り立つわけですよ。	渡辺教諭	はい。
小島委員	2日目は講師の方はおおたかに集まったのか。	渡辺教諭	1日目の夕方におおたかに、2日目の主講師が集まって、講習内容ですとか行動範囲ですとか。ただ2日目の講習についても、あそこの斜面というふうな場所の指定はしますけど、地図上の線引きという点まではしないとありますので。あと、以前ですと冬の那須について知り尽くしているベテランの先生なんかいらっしやって、かなり各班の講師の先生に任せられている部分が昔はあったものですから、それが残っているところがあるかと思います。
戸田委員長	どんどん経験者が少なくなってきたりすると、講師の方に任せるといわれても、講師の方も不安ではなかったかということですね。	渡辺教諭	だから、各班が見える範囲で行動をするようになってきて、だいたい同じような場所です。以前はそれがけっこう離れていたんですが。
戸田委員長	その1日目の話し合いには引率の先生もいらっしやったんですね。	渡辺教諭	いえ、主講師だけです。
戸田委員長	それはどうしてですか。	渡辺教諭	はっきりとした理由は分からないのですが、一応主講師がその班の行動に責任をもって実技講習を行うということで、講習内容については、引率している先生の中で、これとこれの技術はやるけどこれはやらないと聞いても分からなかったりと、それで招いてないのかと個人的には思っています。
戸田委員長	なぜお聞きするかといいますと、下野新聞に記事がありまして、こんなことを言っている人がいるんですよ。9月17日の、昨日の下野と産経新聞。これの関係もあるので、では、打合せをするのは主講師が中心ということですね。	渡辺教諭	はい。

戸田委員長	そうすると、おそらく、推測ですけど、この若い人というのは、それに入っていない先生なのかなと。御遺族の方、最終報告書になるので、いろんなことを調べてほしいとかあって。	渡辺教諭	警察にもお話したことなんですが、私の理解としまして、経験がない方ですと、我々からすると危険でないところをかえって危険になってしまうような対応をすることがありまして、例えば、岩場の通過なんかで、怖がってしまったり、全体が見えなかったりするので。ちゃんとした技術を持っていけば安全に通過できるんですが、そのようなことがあるものですから、技術・知識ある者が判断するというところで、打合せなども主講師が集まるということになったのかと思います。ただ今回結果的には、このような形になってしまったので、そういったところが見方によってはおごり高ぶりではないかと言われてしまえばそれまでですが。
戸田委員長	判断は例えば経験者でいいんだけど、やった結果をきちんと引率とか関係者に周知する必要はあったのかなと感じる。	渡辺教諭	はい。今回は確かに周知してすぐ実行みたいな感じですので、そこは不十分だったかなと思います。
小島委員	当時は思い出させて申し訳ないんですが、当日、先生、風が強くなったので避けようと賢明な行動をされたと思うんですけども、そのときは、視界はどうだったのか。	渡辺教諭	まだ悪くなっていなかったです。雪は変わらず小降り程度で、風が出てきたというのも、地形の変化で、上にでましたんで、風が当たるようになったのか、風が出てきたのか分かりません。
小島委員	ここまでだなという判断はありましたか。	渡辺教諭	その場で下りようというのはありました。生徒たちにもそれを言って。
小島委員	行動を起こしたんですね、その瞬間に。で、登る前も視界は悪くなかった。	渡辺教諭	悪くなかったです。ただ上は始まるときにあまり見えていなかったと思います。スキー場自体の視界はそんなに悪くなかったです。
小島委員	那須のあの辺は、今の時期ですとすぐに雲がかかって、視界がすぐ悪くなっちゃうんですけども、数分おきぐらいにですけども。当時間も2日間やっておられて、悪くなったり良くなったり、その繰り返しはなかったですか。	渡辺教諭	2日目は昼過ぎくらいから予報通り崩れてきて、視界が悪くなって良くなってというのはありました。3日目は、行動始まるまでは、そんな変化はなかったと思います。風はあまりなく、そんな猛烈な雪ではなく、で、事故があつてからどんどん悪くなっていった。雪の降りも風も。
小島委員	分かりました。	渡辺教諭	
戸田委員長	最後になります、先生から何か。	渡辺教諭	私の記憶がちょっと曖昧だったところで、報告書に上げるところで書いたところが、その後、菅又さんなんかと話していて、ちょっと違うのかなという感じだったのが、テントの中の会話の時には、会話そのものでは、スキー場かスキー場周辺というような言い方で、私の中では頭の中でもうそのときに樹林帯まで含めてイメージしていたようで、その後、猪瀬先生が来て三人で話をしたときに、言葉としてそれが出てきたようで、三人が集まったときの記憶がちょっと私曖昧だったようですから、テントの中でのやりとりからそんなような感じだったかなという形で、最初報告しました。 樹林帯とその尾根周辺まで行動しても、と。菅又先生とテントの中でやりとりしたときは、ひよっとすると言葉としては出てなかったのかもかもしれません。
小島委員	そうするとまあ、スキー場周辺というのは意識してなかったというか。	渡辺教諭	私は、最初の場面から樹林帯まで含んでということ。菅又先生は最初そこまでのイメージはなかったようなことを何度も言ひまして。けっこうはっきりした気がしました。
戸田委員長	せっかくだから、何か他にも何か。	渡辺教諭	そんなところですよ。

検証委員会聴取記録

○聴取日：平成29年9月18日(月)13:00～

○後藤 尚

質問者	質問・指示事項等	回答者	回答事項等
委員長	新聞記事にもありましたが、遺族から聞き取り調査の要望があったので、今回お願いした。		
小島	7年前、当日の天候はどうだったか。	後藤	記憶ではガスっていたような気がするが、天候は良かった。
小島	ガスっていたというのは朝からそうだったのか。	後藤	そんなことはなかったかもしれない。よく覚えていない。
小島	山の上の方に登っていったらそうだったのか。	後藤	探したら当時の写真があって、青空だった。天気悪くなかった。記憶では良くなかった気がするが写真を見ると天気は良かった。標高によって悪いところもあったのかもしれないので、それが記憶に残っているのかもしれない。写真を見る限り天気は良かった。
小島	雪の状態、積雪はどうだったか。	後藤	そのときの積雪に関して記憶はあまりないが、写真を見る限り、深くはない。くるぶし程度で、場所によっては雪が風で飛ばされるため積雪は偏るので何センチメートルとは言いにくい。那須は風が強いので深いところなど様々。
小島	現地のどこにいたのか。	後藤	上部にいた。
小島	雪崩には巻き込まれたのか。	後藤	巻き込まれていない。
小島	上部の積雪はどうだったか。	後藤	たいした積雪ではなかった。雪がないわけではなかったが、もぐるような雪ではなかった。雪崩の発生地点の写真もあるが、雪が積もっていてその上に積もった雪が表層雪崩になった。
小島	当日はどういう立場だったか。	後藤	講師だった。大田原高校の生徒を連れていた。当時、渡辺先生(現栃木高校教諭)が委員長で、現場の講習の様子を見に来ていて、雪崩が発生したときは私の班と一緒にいた。
小島	雪崩が起きた後の行動や下山後はどうしたか。	後藤	沢上で雪崩が起きて、沢じゃないところを通って、生徒を連れて下りた。そのとき雪崩に遭った生徒とは接触していたと思うが、記憶にない。多分雪崩で流された人たちは休憩中で、ピッケルが何本か行方不明になった。荷物をなくした者もいたという記憶はある。
小島	その時雪崩で埋もれたという話にはならなかったのか。	後藤	そのときの雪崩で新聞では頭まで埋まったとあったが、見ていないしどこまで流されたかは分からないが、一緒に流されていくときに横になって流れた時に雪がかぶった、ということだと思う。座った状態で雪に埋もれたということではないと想像している。当人と話をしたわけではないので、ちょっと記憶にない。

小島	当時、大変なことが起きたという感じはなかったのか。	後藤	はい。ちょっと危なかったの。
小島	その後、振り返りなど話し合いなどは行われたのか。	後藤	文書は残していない。報告も上げていない。
委員長	振り返りの時はどのような方が集まったのか。	後藤	多分、講習が終わって下のスキー場で、現場にいた人たちはそこで話をしたと思う。多分スキー場に戻って解散するときに講師の先生はそこに残ってすべての班が戻ってくるのを確認すると思うので、そこで話をしていると思う。
委員長	解散の時に話をしたということか。	後藤	あるいは、2日目ですから3日目になるまでの間で特に講師や引率教員を集めてミーティングをしたということはないと思う。
小島	(後藤からの当時の現場の写真を見て) これは雪崩の後の写真か。	後藤	そうです。雪崩の後の写真で、15センチメートルあるかどうかだろう。
小島	写真を撮ったのは、残しておくべきと思ったからか。	後藤	多分そうである。写真の傾斜の切れ目(破断面)から雪崩が起きて、多分私たちはその上にいた。場合によっては、そこで私たちが行動したことそこから雪崩が起きたのかもしれない。
委員長	かなり上の場所なのか。	後藤	標高何メートル地点かということはない。こちらの地図に場所が示してありますが、それくらいの場所だと思う。
委員長	2日目か3日目か分からないが、ミーティング等をしたわけではないが、何となく情報共有をしたということですね。 その翌年は震災があったので、2年後はどのように実施したか。	後藤	その年からは講習会の場所でそこには入らないとお知らせした。
委員長	それはどのような機会に、例えば専門委員会のような機会に知らせたのか。	後藤	1日目の講師打合せとか。記録には残っていないが、例年前年度の11月の専門部委員会で打合せを行い、次年度の行事を決めている。それと同時にその年度の春山講習会についても問題に挙げている。この11月の専門委員会で春山講習会の場所も決めている。 人が写っている写真は下から撮ったもの。
委員長	毎年その11月の専門委員会で決めていたんですね。	後藤	専門部委員会の議題には3月の春山講習会についてが上がる。

委員長	中身は安全のことや雪崩のことを伝えるようなことなのか。	後藤	それから毎年そのことが話題にあがっていたかという分からない。
小島	雪崩が起きる前までは毎年那須で講習会を実施し、上の方まで訓練として登っていたのか。	後藤	その写真でいいますと、写真は上から下を撮っている。上から下だと思う。それは多分雪崩が起きた直後で、人が写っている写真は下から撮ったものである。
小島	時間的には、カメラは1台で上から撮った後、下に下りた後で下から写したのか。	後藤	はい。多分写真のデータファイルを確認すれば撮った時間が分かると思う。
委員長	その写真で、真ん中に人がいっぱい写っているところ、この辺に雪崩が起きたのか。	後藤	その人たちが雪崩で流された人たちだと思う。
小島	写真を撮るなど冷静だと思うが、雪崩が起きたときは見てはいなくて、雪崩が起きたなというので振り返って、数分したら起き上がって立っていたという状況だったのか。	後藤	記憶はあいまいである。雪崩で流されたとは聞いている。
小島	メモ書き等は残っていないのか。	後藤	もしかしたら書いているかもしれないが、分からない。
小島	誰かが書いたというような記憶もないか。	後藤	誰かが書いたという記録があるのか。
小島	そういう意味ではないが、メモ書き程度でそういう事象を書いたものなど。	後藤	私の記憶では、雪崩の後で様子は聞きに行ったと思うが、メモしたかは分からない。そのようなメモを発見していない。
委員長	深い雪崩ではなさそうだ。頭まで埋もれるようなものではなく、倒れて流された可能性はある。	後藤	傾斜が変わらなかったのも多分、急激に集まって埋められるということではなかった。
	(写真の確認しながら)	後藤	カメラを構えている場所が上から撮った写真で、下に下りて撮った写真に写っているのはテラオカ先生で現在は栃木県の教員はしていない。常勤講師として足利高校に勤務していた。右側の赤いのは元委員長をしていた渡辺先生です。高校生が雪崩に流されれば興奮状態になって少しパニックはあったかもしれないので、頭まで埋まったというような表現もするかもしれない。

小島	講師と顧問の関係はどうだったか。	後藤	<p>体育会系のような先輩・後輩のような関係はない。経験の浅い先生は頼まれて顧問になっている方が多い。そういう先生方にやっていただかないと部活動が成立しない。若手を大事に育ててもらおうという感じで、厳しく鍛えていこうというような感じではないと思う。少し前までは高体連登山専門部で海外遠征を行っていた。そういった合宿に参加してくる人達は厳しい状況も出てくるので、また違った状況かもしれない。</p>
戸田	専門委員長などが何かを決定した時など、情報等の伝え方はどうしているのか。	後藤	<p>普段の大会のときは顧問ミーティングで行っている。春山講習会では講師のミーティングを行い朝講師から引率教員や生徒に伝えるという形。民宿おおたかに本部を置いていたので、テント場からは少し距離があるので、そこでミーティングをやるが多かった。普段はキャンプ場に本部を置いていたので、そこで顧問のミーティングをして次の日の行動について打合せをして、話し合っておくというスタイル。</p>
小島	その時はどういったメンバーが集まるのか。	後藤	<p>講師、引率教員全員が集まり、ミーティングを行う。大会の時は3日目のうち、初日の夕方に顧問全員で顔合わせをしてミーティングを行う。初対面の顧問もいるため。</p>
委員長	春山講習会の場合は異なるのか。	後藤	<p>春山講習会については本部が別の場所にあるので、講師の先生で行う。</p>
委員長	今回の事故の前に、「反対」や「不安」という声はなかったか。	後藤	<p>毛塚先生のお父さんのアンケートに誰かが答えたのだろう。初めてやる経験が浅い方にすれば、雪が降った日の朝に集めたら行きたくないと思つたらうし、「あそこは雪崩れる危険があると思うか。」と聞かれれば、よく分からないので、それもあつたらうなと答えた可能性もある。どの様に感じて、思つて書いたかは私は分からないが、想像するに、そういう答えが出てきても不思議ではない。</p>
委員長	先ほどの通り、バリバリの体育会系のような「うるさい文句言うな。」みたいなような事はないか。	後藤	<p>その様な事はない。生徒が「行きたくないよね。寒いよね。危ないんじゃない。」とか、友達とつぶやくことがありうと思うが、たぶんそういうことだと思う。会議の場で先生方が手を上げて、それについて「それについてどうですか。」ということがあればそういう表現になる。決して先生方から質問があるとき、「お前ら訳分かってないから黙れ。」といったことは、100%じゃなくて、1000%くらいない。なぜなら先生方には、長く顧問を続けてほしいという思いが強いから。少なくとも新しい顧問の先生は大事にして長く続けてほしいという思いがある。</p>

小島	今も山岳部の顧問をしているのか。	後藤	今は山岳部がない学校におり、専門委員だけやっている。ぜひ専門委員に残してくれと言ったわけではないが、大会や講習会のために経験のある人間を残しておきたいという意図で。かつては学校に登山部がない教員が専門委員になることはなかったと思う。それは何年前からかは分からない。私もかつて専門委員長をしていたが、私がやっていた時はそのような事例はなかった。
小島	委員はどのように選ばれているのか。	後藤	6年くらいのスパンで交代する。県高体連の規定では任期が2年となっているが、4～6年くらい経つ頃にそろそろ次は誰かなという感じで話し合いで決めている。
委員長	話は変わるが、17年程前に、あそこの樹林帯は雪崩が多く危険だという町の職員からの話は聞いたか。	後藤	聞いたことがあると思う。「あの辺」と言ったのか「尾根上」と言ったのか、それについては記憶があいまい。
委員長	それは、町の職員だったのか。	後藤	私の記憶では、17年前の委員長は多分私で、2000年から4年間専門委員長をしていた際、県北の学校の顧問が現地の下見に行き、スキー場にあいさつに行ったとき、私の記憶では町の職員なのかスキー場のスタッフなのかははっきり覚えていない。そこにいた方からその話を聞いた覚えはある。私の認識では、雪が降った後は雪崩など危ないというような認識だった。
小島	過去にゲレンデ付近や樹林帯付近まで登ったことはあったか。	後藤	尾根の上や天狗岩まで行ったこともあった。雪が少なかった年だと思う。1・2回程度行った。
小島	「雪が少ない」という目安や感覚は何なのか。	後藤	スキー場のゲレンデに土の斜面が見えているとか、トイレがあるゲストハウス前の平らなところに地肌が出ているような状態(山肌は見えていない)だと天狗岩まで行っていたという記憶はある。どの年に行ったかは記憶にない。
委員長	17年前も含めて、雪崩が起きるとい認識はあったか。	後藤	那須であまり雪崩を心配したことはあまりない。実際にその年には雪崩が起きていますが。
戸田	17年前に町の職員かもしれない人に危ないと注意を受けて、雪崩が起きるかもしれないと認識されたようだが、そのことが次年度以降の専門委員会や講習会等での話をするなど伝えるようなことはあったのか。	後藤	あまり伝えることはしていなかった。その年は言われて注意しようと伝えたかもしれないが、その時以外は毎年特に伝えるようなことはしていなかった。

委員長	他に何かあるか。	後藤	講習会の本部は民宿おおたかにあり、そこには那須山岳救助隊の■■■さんがいらっしゃるが、せっかくそこに本部を置きながら講師打合せで助言等をいただいたことはなかった。助言等をいただければよかった。自分の認識で、雪が落ち着いている年は今回の場所で講習会をやったこともあった。そこに行っていたことで、講習会の行動範囲として認識されてしまったのかもしれない。もっと雪の状況で態度を変更することを共通理解しておけばよかった。
-----	----------	----	--

検証委員会聴取記録

○聴取日:平成29年9月18日(月)13:40~14:15

○滝田道明氏(元矢板高校教諭 7年目4班講師(矢板東高校 矢板中央高校))

質問者: 区分	質問・指示事項等	回答者	回答事項等
委員長	質問 事故の検証を進める中で、遺族の中から、7年前の事について、もう一度調査して欲しいと要望があってそのことと、若干その他の事についても伺いたい。	滝田	自分で準備してきた資料に基づいて説明 1 郭公沢を春山講習会に選定する理由 2 郭公沢のカールのコンディション 3 雪崩れ発生当日の旧積雪量の程度(推測) 4 雪崩れ発生当日の新雪積雪量の程度(推測) 5 雪崩れに埋没したとき生徒の深さ 30cmの根拠 6 雪崩れに対しての表現・評価の温度差の違い
小島	質問 この記録は、記憶をたどってメモしたと考えてよろしいか。	滝田	記録と何十回もやっているからその記憶でまとめたものである。
小島	質問 郭公沢では何年ぐらい講習をやっていたのか。	滝田	私は教員になってから30数年登山部の顧問だったので、この講習会では大体、郭公沢でやっていた。
小島	質問 新聞記事の事だが、子どもが埋まってしまうとは考えられないと言及してもよろしいか。	滝田	休憩時は落石や雪崩があるから上を向いて休むのが常識だと教えていたつもり。生徒達は雪から出ている瓦礫に荷物を置いて休んでいた。私は10mぐらい離れた岩と氷がミックスしたところで次の講習のコースを検討しながら休んでいたところ、上部の雪崩れ発生地点をザイルで降りようとする黒い影が見えた。雪底のような所だったので危ないなと思い見ていた。ザイルで雪の塊を落とすような形になった。音もなく雪が落ちてきた。気がついた子ども達はすぐに雪崩から逃げられたが、気がつくのが遅かった、あるいは、座っていた生徒は、巻き込まれて、荷物やピッケルと一緒に、転がされた状態。人間は雪より重いので、たとえ30cmであっても雪の下の方へいく。雪をかぶるような状態になったが、全員が自力で脱出できるような状態だった。「全員いるか確認しろと。」言った記憶がある。
小島	質問 雪の中からむくむくと出てきたという表現だが、見えなくなっていたと解釈してよいのか。	滝田	全員が見えなくなったわけではない。全身雪にまみれて30cmぐらい下に潜ってしまった生徒もいると思うがすぐに起き上がってきた。
小島	質問 その時子ども達から「ああ」とか声は上がっていなかったか。	滝田	「ああ」とか声は上がっていなかったが、「びっくりした。」というのは覚えている。
小島	質問 泣いている人はいなかったか。	滝田	泣いている人はいなかった。巻き込まれた中には「もうトレーニングやめよう。」と言った生徒もいたかと思う。私は大丈夫だと思って、一休みした後、岩と氷がミックスした場所を歩かせてテント場へ戻ってきた。
小島	質問 「雪崩の後にまだ訓練続けられるのに」と不満を持つ生徒はいなかったのか。	滝田	それはなかった。早くトレーニングを終了して、テント場に戻らなければ体が冷えてしまうのでと思った。
小島	質問 雪崩が起きた後の、先生や講師間の情報の共有はしたのか。	滝田	見る先生は少なかったと思う。その時間にその場所にいたのは私の班のみ。多分その後、隣の稲荷沢で訓練したグループが最後に私たちの方へ移動してきたのだと思う。その後天場に帰り、皆にあそこで雪崩が起きたと報告した。
小島	質問 みんなとういのは。	滝田	顧問。
小島	質問 大変だったとか、大したことなかったなど会話だったのだから	滝田	今回のような雪崩ではなかったのです。

小島	質問	振り返りや、情報共有して、先生の気に入っている場所ではあるけど、もうここでの訓練はやらないよという提案ぐらいはしたのか。	滝田	いや。どんなに緩いスキー場であっても条件さえそろえば雪崩が発生するし、急斜面であっても条件がそろわなければ雪崩は発生しない。状況を判断する能力が一番大切だと思う。
小島	質問	翌年度からここではやらなくなったのでしょうか。	滝田	そんなことはない。例えば雪が多くて、とてもあそこまでは行けないとか別な条件が発生して、そこには行けないとかの場合は別。指導者が好んで毎年やっている場所があって、それぞれ別れて実施してる。郭公沢はせいぜい2パーティーぐらいしか来ない場所。
委員長	確認	場所は講師が好きな場所を選んですると。	滝田	そうである。お互い無線でここでやってると確認し合っている。
小島	質問	本部には。	滝田	本部にも当然通じます。
委員長	確認	どこでやるかは講師に一任されている。そこで無線で連絡を取り合っているということか。	滝田	そうだ。あとは、生徒のレベルにもよる。学校によってレベルの違いがある。雪山の経験がない高校もあれば、冬山合宿に行っている学校もある。その生徒のレベルに合わせて組んで、そのレベルにあった場所に連れて行く。
委員長	質問	7年前の雪崩の状況があったので、翌年から郭公沢は使わないことにしたと言っている先生もいるが、それは違うのか。	滝田	それは違うと思う。
委員長	質問	専門委員会で話題になって、「よし、やめよう。」という事にはならなかったのか。	滝田	ならなかったと思う。
委員等	質問	翌年以降も郭公沢を使った事があるということか。	滝田	はっきりした記憶はないが、使っていたと思う。いろいろな条件がそろっている場所なので。
小島	質問	それは、夏山や冬山も含めての話なのか。	滝田	春山講習会の場所としていい場所ということ。
小島	質問	引率の方が先頭で、後から生徒が見守るかんじで、コースを選ぶ方式は以前から使われてきたのか。	滝田	安全確保が一番大切なので、コースを示し目的地に行って、Aのトレーニングをしよう。次はあそこに行つてBのトレーニングをしよう。
小島	質問	先生が先頭に立ってコース取りして、生徒に教えて、後ろにはもう一人先生は……。	滝田	ラッセルで。ただラッセルというのは、あまり経験のない先生がつくと、場合によっては生徒より経験がない、体力がない先生がつくことがある。経験が豊富な指導者が前後なかなか二人そろわない。
小島	質問	10m離れた場所というと、結構離れていると思うが、それはあまり危険な状態ではないのか。	滝田	場所による。郭公沢は、カールはあるがフラットな場所なので、10m離れていても、クレバスがあるわけでもない。
小島	質問	ドミノ倒しの様な雪崩とは。	滝田	上から雪崩が始まって、そのショックで下の雪が少し動いた。その影響で更にその下の雪が動いたという形で、結果的には上の雪は下まで来ないで途中で止まっているという形。雪崩が起きた上は積雪3cmと報告したが、上の方は急斜面であまり雪は着かない。3cmの所にその上の大きなブロックが落ちてそこから雪崩が始まった。
委員長	質問	17年ぐらい前に、スキー場の関係者が、当時の専門委員長あたりに、樹林帯のあたりは雪崩があるからその辺には入らないよと聞いたや言ったといった情報があるがその話を聞いたことはあるか。	滝田	聞いたことはないが暗黙の了解で、スキー場でやる場合は、スキー場のエリア外の上の方までは行かない。私も行ったことはない。年によって上から雪崩の跡が見える。雪崩が起きるたびあそここの斜面は木が生えない。雪崩が止まったところから木が生えている。だから私はあそこは危険地帯と認識している。

委員長	質問	その様な認識は、先生の後輩達は持っているのか。	滝田	私たちの頃は雪の降った次の日は行動するなが鉄則だった。理由は雪崩が発生するからと、歩いても進まず体力の無駄になるから休養日にしろが常識だった。最近、私みたいにならずと最初から最後まで山岳部顧問ではなく、学校が変わるたび顧問が替わる。そのため伝承・伝達されない。
委員長	質問	先生の認識は伝わっていないと。	滝田	はい。山岳部顧問で岩登り講習会と、春山の講習会があるが、最近山があまり好きでは顧問が増えて、校務で2日目の講習はキャンセルするなどが増え、実力がつかない。温暖化の影響で、春先にどか雪が降る。事故の次の日生徒のテント場の撤収に来たが、かなりの積雪があった。あれでは少し危ないなと思った。そういう現象が増えていると思う。
小島	質問	今回の委員長や副委員長の力量は御存知と思うが、委員長なり副委員長なりにふさわしい方だったのか。	滝田	結果的に事故発生したって事は不十分な点があったと思う。
小島	質問	事故は考えないで。	滝田	顧問としての接触はあったが
小島	質問	当然経験もあって、性格的にもまめでいろいろやってくれるんで。	滝田	そういった点では問題ないと思う。私たちの時代は5年おきにヒマラヤへ行った。ヒマラヤのために日本の山でトレーニングし、力量や経験を高めたことが危険を回避する能力につながったと思う。経験のない先生方が経験を積めるシステムがあるといい。
委員長		最後になにかあれば。	滝田	献花台の整理をしてきたが、先輩として後輩に何もできなかった事が本当に悔しい。献花に頻繁に来る。お盆を過ぎてもいつも新しい花があがっている。本当に申し訳なく、責任の一端を感じる。
写真をもとに位置関係の確認				
委員長	質問	自力でむくむく起き上がった生徒は何人ぐらいいたのか。	滝田	はっきりとは覚えていないが、2、3名だと思う、姿が見えなくなったのは。
委員長	質問	新聞の報道だと、埋もれてしかも自力で脱出できなくて、救助してもらったというニュアンスで書いてあったが。	滝田	救助しようとは思ったが、救助はしなかったと思う。すぐに雪から出てきたから。

検証委員会聴取記録

○聴取日:平成29年9月18日(月)14:23～

○石澤 好文

質問者	区分	質問・指示事項等	回答者	回答事項等
委員長	あいさつ	遺族から聞き取り調査の要望があったので、17年前の件についてこの後お聞きしたい。		
委員長	質問	17年前、スキー場あるいは町の人から当時の専門委員のどなたかに今回事故のあった樹林帯などは雪崩がよく起こるので危険だという話は聞いたことがあるか。	石澤	記憶があいまいである。民宿おたかの本部に泊まっていた。訓練場所については救助隊をされていた[]さんに訓練をする場所についてアドバイスを受けていたことはある。天狗の鼻に雪があると危険という話を聞いていたのは覚えている。それが17年前かは定かではない。
委員長	質問	あの辺で講習会の際に雪崩が起きたことはあるか。	石澤	私の経験ではない。
委員長	質問	7年前の郭公沢での雪崩が起きたときはもう指導はされていなかったのか。	石澤	私は直接担当してはおらず、校長をしていたかと思う。専門部長であったかどうかは微妙なところである。委員長は渡辺先生だった。7年前の話は聞いていない。つい最近、この話が出てきてから滝田と後藤の方から聞いた。
委員長	質問	訓練の隊列について、今回は一番最後に講師がいて、その前に引率者がいて、その前に生徒がいて前の方を元気な2年生が引っ張っていたようである。そういう隊列は通常ありえるのか。	石澤	場合による。私が担当していたときは、新たな場所に行く際には、先頭は基本的に講師(教員)がつき、最後尾にも教員が付いた。ひと班に2人教員がついていた。最近については立ち会っていないので分からない。
戸田	質問	顧問間で雪崩に気を付けるという情報を共有していた機会はあったか。	石澤	雪崩がある場所で私がおさえていたのは天狗の鼻の一番左側と、第2ゲレンデの上部。これらについてはいつも雪が降ったら危ないということは顧問間で共通認識はあった。ただし、郭公沢、稲荷沢はかなり大雪が降らない限り話題に出なかった。私が顧問や委員長をしているとき、大雪が降ったことがなかったので特に注意を払わなかった。実際雪崩もなかった。
小島	質問	春山講習会はコンディションが良ければ樹林帯を抜けるの実施ということはあったか。	石澤	教員として採用されて20～30年登山専門部でやっていたが、天狗の鼻の斜面方面には行かなかった。
小島	質問	天狗の鼻方面に行かなかったのは、郭公沢がちょうどいい練習場だったからか。	石澤	そうです。郭公沢、稲荷沢、峠の茶屋の少し上辺りの斜面で実施していた。最終日は茶臼岳山頂に登った。女子の班は一部下で訓練していたかもしれないが、天狗の鼻方面には行っていない。

(写真を見ながら訓練場所や危険な場所等を確認)

委員長	質問	登山部顧問の後継者が少ない中、講習会を継続して安全に続けていくのは難しいのではないか。	石澤	確かにある。私が顧問になった頃は専門的に大学などで経験していた者が多く、充実していた。当時春山講習会では、顧問のみで構成する顧問班を作りスキルアップを図っていた。私が委員長をしていたころは顧問班を作ってやれていたが、最後の頃は顧問の数が少なくなってきて、顧問班を作る余裕がなくなった。それからは顧問と生徒が一緒に班編制で実施するようになった。
小島	質問	それはいつ頃からか。	石澤	12～13年前からだろうか。8年前に雪崩があったあの前後よりむしろ前からだろう。私が委員長をしていた最後の頃だった。
委員長	質問	何か名案はあるか。	石澤	難しい問題だ。顧問の確保が一番の課題だった。山の経験がある人がなかなか教員になっていない。学校の組織の中で顧問に充てられた方をうまく指導したり登山研修所等の研修会に派遣してもらったりしてスキルアップしてきた。教員の仕事が忙しくなってきたことも大きい。若い顧問の先生をプライベートで山に連れて行くことはなかなかなかった。2000年、最後の海外遠征があり、その遠征を目的に冬山に顧問同士で若手を引っ張りながら登っていたが、その5年後くらいから顧問同士で冬山に行くことが少なくなった。顧問の力量という点からするとなかなか難しかったのかもしれない。
委員長	意見	そうですね。種目によっては、水泳部の顧問など、泳げない人が顧問になっても勉強したり、生徒同士で安全にやらせるなどして、できないことはないですよ。		
小島	質問	登山部の顧問と他の部活動の顧問とは違ってきますよね。	石澤	そうですね。現場に行って一緒に行動しないといけない。また、生徒が進級し上達してくると希望も満たしてあげるために顧問のスキルも必要になってくる。その点が非常に難しい問題だ。
戸田	質問	部活動では外部指導員の制度もあると思うがどうか。	石澤	かなり緩和されると思う。外部指導者員は良いことで、そのことで安全対策を図ることもできる。しかし、顧問がどのようにリーダーシップをとれるかが問われる。そういうことは誰も経験がないことなので難しいのではないかと思う。

委員長	質問	登山の時だけでも、ということもできると思うがどうか。	石澤	それが現実的な考え方だろう。例えば大田原高校のようにOBをボランティアで付けて夏山や冬山に登っている例もある。
委員長	質問	それはかなり安心できるのか。	石澤	安心だ。若手の顧問よりもはるかに経験がある。
委員長	意見	そんな中で顧問も経験を重ねて指導力を身につけて、自分で指導できるようになっていくということ。時間はかかるけれども有効な方法だ。	石澤	もう一つ問題点がある。若手の顧問に力量がついても異動となってしまう。現在は昔と違って加盟校が30校に満たない状況のため、登山部がない学校へ赴任することも多い。そうなるとますます顧問が手薄になっていってしまうという悪循環がある。私立はいいかもしれないが、県立では研修会に参加したり指導員の資格をとったりしても登山部のない学校への異動が多く、難しい問題である。どうしようもないことではあるが。
委員長	質問	メジャーな競技ではなくマイナー種目の厳しさがあるのだろう。この際、他に何かあるか。	石澤	特にない。ご迷惑をおかけいたしました。なにとぞよろしくお願いいたします。